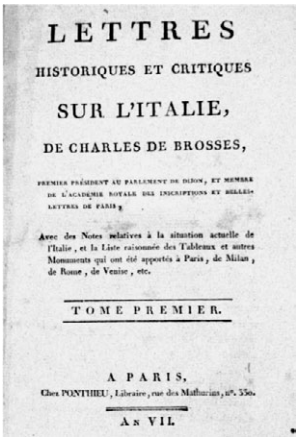
シャルル・ド・ブロスと18世紀啓蒙—その思想と知的生活
Charles de Brosses et le siècle des Lumières: une notice biographique intellectuelle

杉　本　隆　司
SUGIMOTO Takashi

はじめに

愛読書の一つであった『イタリア便り』新版の序文を依頼されたスタンダールは19世紀前半にこう書いている。「ド・ブロス氏は，サリュスティウスの翻訳『ローマ共和国七世紀史』，つまりカティリナ，カエサル，キケロ等々，『言語史』等々といった忘れられた良書を公にしたが，将来はただ魅力的な『イタリア便り』によってのみ知られるであろう[1]」。幸いにも現在までシャルル・ド・ブロス（1709–1777）の名はこの作品に限らず，我々はその名を目にすることができるが，この評価は19世紀全般を通じて一般に妥当したといってよい。実際，遺稿『イタリア便り』（1799）は19世紀に多くの版を重ね，スタンダールやサント・ブーヴら著名な文人たちがその論評を公にしているが，これ以外の著作やその著者へのこの時代の人々の関心は，ある逸話に対する強い好奇心を除けば，それほどみられなかったからである。周知のようにその逸話とはヴォルテールとの大喧嘩である。


LETTRES
HISTORIQUES ET CRITIQUES
SUR L'ITALIE,
DE CHARLES DE BROSSES,
PREMIER PRÉSIDENT AU PARLEMENT DE DIJON, ET MEMBRE DE L'ACADÉMIE ROYALE DES INSCRIPTIONS ET BELLES-LETTRES DE PARIS;
Avec des Notes relatives à la situation actuelle de l'Italie, et la Liste raisonnée des Tableaux et autres Monuments qui ont été apportés à Paris, de Milan, de Rome, de Venise, etc.
TOME PREMIER.
A PARIS,
Chez PONTHIEU, Libraire, rue des Mathurins, n°. 550.
An VII.

『イタリア便り』初版（1799）
（一橋大学古典資料センター蔵）

この逸話が19世紀の文人たちに知られるようになったのは，ブルゴーニュ史家テオフィル・フォワセによる評伝『プレジダン・ド・ブロス』（1842），および『ヴォルテール＝ド・ブロス書簡集』（1858）の出版によるところが大きい[2]。特に前者の評伝はこの逸話に留まらず，18世紀のフランス社会の文化的背景をも視野に納めつつ，ディジョン高等法院官としての政治生活から，文壇やアカデミーの会員としての著作活動に至るまで，ド・ブロスその人のあらゆる側面が詳細に描かれている。19世紀中にアンリ・マメによる評伝がもう一冊出されるが[3]，質・量ともフォワセのそれを越えるものではないというその後の史家の一致した見解からしても[4]，ド・ブロス研究史上この書が占めてきた地位は現在まで格別であるといえる。本稿の記述もこ

---

[1] スタンダール「一八三六年において喜劇は不可能である」『スタンダール全集』第10巻，生島遼一ほか訳，人文書院，1973年，322ページ

[2] Th. Foisset, *Le Président de Brosses: Histoire des lettres et des parlements au XVIIIe siècle*, Paris, 1842; Idem, *Voltaire et le Président de Brosses: Correspondance inédite*, Paris, 1858

[3] H. Mamet, *Le Président de Brosses, sa vie et ses ouvrages*, Lille, 1874

[4] G. Boissier, «Un grand homme de province», in *Revue des Deux Mondes*, t. 12, Paris, 1875, p. 757; G. Socio, *Le Président de Brosses et l'Italie*, Rome, 1923, pp. 2–5

のディジョンの碩学の研究によるところが少なくない。しかしアルデも指摘するように，その郷土愛からくる首都パリとそこで花開いた18世紀啓蒙思想―つまりその代表がヴォルテールとその思想である―に対する，この時代の王党派特有の「強迫的偏見[5]」ともいえる対抗心から，現代から見るとやや奇異に思われる非難がしばしば現れている[6]。

当然，この見方は主にこれらの書を介してド・ブロスに触れた19世紀の文士たちの筆にも看取できる。「ド・ブロスは確かに幾つかの点で18世紀に属していたが，［『ローマ共和国史』のような］古代や古典的原典への回帰が要因となって，同時代のフィロゾーフ党派やその運動に決して加わらなかった。彼はもっと広い見識と自律性をもっていたのだ。彼は［同郷の］ビュフォン同様，誰かのスローガンを受け入れたりはしなかった。学問とその発展の公然たる愛好者であり，祖国の栄光と人類の福祉の熱望者であった彼のその全般的なアイデアは，ベーコンの自由な刺激に由来しても，決して百科全書からなのではない[7]」（サント・ブーヴ）。このような評価は文士自身の思想傾向にも依るし，ド・ブロスが狭い意味での百科全書派に属さなかったことも事実であろう。だが19世紀を通じて，イタリアの重苦しいゴシック趣味を笑い飛ばし，教皇の葬式を皮肉るユーモアに富んだ『イタリア便り』の快活な文士として，勇敢にも「文芸共和国の独裁者[8]」ヴォルテールとその一派に戦いを挑んだ高潔の士としてのみその名を歴史に残していたド・ブロスは，20世紀に著作の個別研究や地方史研究が進むにつれて，単なる旅行記作家や地方の博学な司法官ではなく啓蒙思想の一翼を担った一人の思想家と考えられるようになってゆく。ルソーと同様，ド・ブロスもまたパリを震源とした啓蒙運動の主流には属さなかったが，決してそれに背を向けた地方の一文士に留まったわけではない。

以上の視点からここでは作家，あるいは19世紀の評伝が前面に掲げる「フィロゾーフ党派の犠牲者」像と距離をとり，日本はもちろん[9]フランスでもあまり知られていない啓蒙思想家としてのド・ブロスの足跡を辿ることにしたい。彼の主な著作は，すでに名の挙がった3作品に，『南方大陸航海史』（1756）と『フェティシュ神の崇拝』（1760）を加えた5つであるが，文学作品『イタリア便り』を除けば，18世紀思想研究において今日ではほとんど省みられない著作といってよい。このうち当時のフランス社会とその思潮の表舞台と接点をもった幾つかの著作に焦点を当てつつ，ド・ブロスと啓蒙運動との繋がりを，彼が生きた社会生活とその知的活動の二つの側面から扱うことになる。但し，20世紀以降，各著作の個別研究が進んだとはいえ，これら各分野の専門テーマ（植民地主義研究，比較宗教学研究，言語起源論研究，等々）

---

5) H. Harder, *Le Président de Brosses et le voyage en Italie au dix-huitième siècle*, Slatkine, 1981, p. 238

6) ヴォルテールとの喧嘩と，彼によるド・ブロスのアカデミー・フランセーズ落選工作は，19世紀のブルゴーニュ史家たちにはド・ブロスとその郷里の復権を，反啓蒙主義者にはフィロゾーフたちの横暴を知らしめる格好の題材となった。Foisset, *op. cit*., 1842, Ch. V; G. Boissier, *op. cit*.; Sainte-Beuve, «Voltaire et le président de Brosses», in *Causeries du Landi* du 8 nov. 1852, Garnier Frères, t. 7.; Cunisset-Carnot, *La querelle du président de Brosses avec Voltaire*, Dijon, 1888；ストレイチー「プレジダン・ド・ブロス」『てのひらの肖像画』中野康司訳，みすず書房，1999年。ヴォルテール研究者側からの証言は次をみよ。J. Orieux, *Voltaire*, Flammarion,［1966］1999, pp. 561–565（古野清人『宗教生活の基本構造』社会思想社，1971年，58～62ページにこの抄訳がある。）

7) C.-A. Sainte-Beuve, «Le Président de Brosses», in *ibid*, du 1er nov. 1852, p. 89, 強調イタリック。

8) Foisset, *op. cit*., p. 139

9) 日本では宗教社会学者古野清人によるド・ブロス紹介が唯一といっていい。古野清人「シャルル・ド・ブロスと実証的精神」前掲書所収。

を消化した総合的なド・ブロス像を提示する研究は現在まで登場しておらず，本小論もド・ブロス研究を開始するための一つの展望を提示するに留まるものであることを，あらかじめお断りしておきたい。

一　社会生活と知的風土

1.　ド・ブロスと人文主義の精神

トゥルネー伯・モンファルコン男爵，ディジョン高等法院院長シャルル・ド・ブロスは，1709 年 2 月 7 日ブルゴーニュの首府ディジョンに生まれた。15 世紀初頭まで遡る彼の家系はジュネーヴ近郊にその起源をもち，17 世紀初頭に法服貴族となった後はブルゴーニュに移って代々高等法院の要職を継いできたディジョンでも名家の一つであった[10]。自身もその評定官であった同名の父シャルルは人文主義の教養に長け，地理学，古代・現代史，古典文学が息子の教育の中心におかれた。母ピエレット・フェーヴルも教養ある家系の出であり，その父ピエールはブルゴーニュ公立図書館[11] 発足時（1708）の膨大な蔵書の寄贈者としてその名を後世に伝えている。ド・ブロス 14 歳の時に父が他界する不幸に見舞われるが，家庭での彼の教育はこの教養ある母によって受け継がれた。同時代の多くの子弟と同様，ド・ブロスもイエズス会が運営するコレージュ・デ・ゴドランに通うことになるが，そこで生涯忘れがたい二人の人物と出会う。一人は彼の同窓生であり，生涯親交を結ぶことになるビュフォンである。もう一人は彼の教師であったウーダン神父である。ホメロスの翻訳を手がけ，ラテン詩にも精通し，神学者というよりもむしろ人文主義者として培った彼の学識は，父と共にド・ブロスに大きな影響を与えたといわれている。

コレージュ時代に身につけた古典的教養に加え，代々の家業を継ぐために，ド・ブロスはブルゴーニュ大学法学部に登録する。1723 年に開設[12] されたばかりのこの大学は学部といってもこの法学部しかなく，人数も限られた小規模なものであった。彼は法学の面でも才能を発揮して優秀な成績で卒業するが，その卒業式では次のようなエピソードが伝えられている。「最終試験にパスした時，彼は踏台に登って表彰を受けねばならなかった。これがないと講演台の後ろに隠れてしまい，後方の免状受領者たちから全く姿が見えなくなってしまったからである[13]」。幼少の頃から小柄で必ずしも丈夫でなかった彼が晴れて学位を取得したこの時には，その息子への真摯な教育が教授団に認められ，母ピエレットも共に祝福された。このように弱冠 21 歳の若さでド・ブロスは法院人として誉れ高かった父の後を継ぎ 1730 年にディジョン高等法院の評定官に任官する。この若き司法官はその職務はもちろん，地方領主として社交界にも顔を出して人脈を広げ，その合間をぬって引き続き人文主義研究にも変わらぬ熱意をもって取り組んでゆくことになる。

ヴォルテールが「多くの文士を生み出し，精神の価値が市民の性格の一つになっている都

---

[10] Cf., A. De Brosses, «L'ascendance du Président de Brosses», in *Mémoire de l'Academie des sciences, arts et belles lettres de Dijon*, t. 126, 1983–1984, pp. 141–151

[11] 現在のディジョン市立図書館の前身にあたり，1708 年以前はイエズス会のゴドラン校付属図書館だった。Cf., J. Goussard, *Nouveau guide pittoresque du voyageur à Dijon*, 3éd., Dijon, 1861, pp. 275–276

[12] 本稿ではすべて施設・協会等の開設年は行政認可が下りた年ではなく，実際に開講・開校した年に統一した。Cf., J-F. Bazin, *Le Tout Dijon*, Clea, 2003

[13] Foisset, *op. cit.*, p. 11

市[14]」と賞賛した当時のディジョンは，実際，パリの碑文・文芸アカデミーに5人，パリの科学アカデミーに3人，そしてアカデミー・フランセーズに4人もの会員を輩出し，地方都市とはいえド・ブロスには知的環境として申し分ないものであった。とりわけ18世紀の初頭以来，ディジョンの文化生活は一人の重鎮によって代表されていた。ヴォルテールがのちにアカデミー・フランセーズの席を引き継ぐ，高等法院部長評定官ジャン・ブイエ（1673–1746）である。彼はヘロドトスの翻訳やキケロの注釈などの歴史研究によって，その名をヨーロッパ中に知られていた人文主義の大文献学者であった。当時のディジョンには多くの蔵書を誇る館が多数あったが，特にブイエの館は2万5,000冊以上の蔵書と1,500もの写本に囲まれた，書斎というより文字通り図書館と呼ぶべき書庫を構え，ここを拠点に法服貴族だけの「ブイエの会」なる文芸協会が設置されていたのである。その会合で徐々に頭角を顕わしていった熱心なメンバーこそド・ブロスであった。40歳近い開きがあるが，飽くなき好奇心や多様な分野に対する強い関心，その研究方針等々，ド・ブロスが彼からうけた影響は大きい。師ブイエに倣い，彼もまた古代の文献研究に取り組み，ローマの史家サリュスティウス（B.C. 87–35）の『ローマ共和国史』の校訂作業を自らの研究テーマに決める。

ウニゲニトゥス教書に端を発する1730年代のジャンセニズム論争が一段落した1739年5月，この問題に奔走していたド・ブロスは満を持したかのように3人の同僚と共にイタリア旅行に出発する。イタリア旅行は古くモンテーニュ以来ヨーロッパで長い伝統を持ち，16世紀からフランスでも音楽や芸術分野での一種のイタリア狂の風潮がこの伝統を支えてきたが，ルイ14世時代のパリにおいてはすでにイタリアに対する憧憬の念は殆ど失われていた。それゆえド・ブロスはじめ，若きビュフォンやその他ディジョンの教養人たちが18世紀の半ばのこの時代になおも「イタリア詣」を行っていたという事実は，この都市に独特な，ある意味で保守的な人文主義の伝統と決して無関係ではない[15]。イタリア旅行中，ド・ブロスはサリュスティウスの未発見草稿を求めてイタリア各地の大図書館を巡った。『共和国史』の断章は，彼以前にも学者たちが収集してきたが，情報源が不明だったり，サリュスティウスとは無関係な草稿が接合されたりと，極めて粗雑な研究状況にあったのである。周知のようにこの旅行がベースとなってのちの『イタリア便り』へと結実してゆくのだが，ミラノでは5館，ローマでは7館といった具合に精力的に図書館を訪ね歩いており[16]，必ずしも明確な目的のない旅だった[17]というわけではない。

最終的にイタリアはじめ各地から700以上の断章を集め，それと過去10版分の『共和国史』を何度も突き合わせながら，古代の著述家たちの記録を頼りに丹念に修正を重ね，多くの断章の欠落を埋めていった。これを人文主義の学識を総動員した傑作の一つにしようと意気込んでいたド・ブロスにとって，その完成稿の紛失は生涯の一大事件となった。ついに印刷許可がおりた1744年，彼は万全を期すために同郷の国王付書誌学者メロに草稿の最終校訂を依頼する。ところが他の仕事に忙殺されていたメロはこの草稿を不注意から紛失してしまうのである。あ

---

[14] Mamet, *op. cit.*, p. 16に引かれたヴォルテールの証言。

[15] M. Bouchard, *De l'humanisme à l'encyclopédie: l'esprit public en Bourgogne sous l'ancien régime*, Hachette, 1930, pp. 472–474

[16] A. Masson, «Montesquieu, le président de Brosses et le décor des Bibliothèques», in *Mélanges d'histoire du Livre et des Bibliothèques*, D'Argences, 1960, p. 319

[17] 鳥越輝昭『ヴェネツィアの光と影』大修館書店，1994年，211ページ

まりの失望から，ド・ブロスは当分の間自分の前でサリュスティウスの名を口にすることすら周囲の人に禁じたという。1750 年頃から再度一からこの仕事に取り組み，生涯を懸けたこの仕事はサリュスティウス『ローマ共和国七世紀史』批判的校訂版（1777）としてようやく陽の目を見るが，その直前に他界した著者がその製本版に眼を通すことはついに叶わなかった[18]。

伝記作家マメは，ド・ブロスの著作の中でも最初に構想され，最後まで手が加えられたこの書を彼の主著に挙げているが[19]，皮肉にも現在ではむしろ彼の著書のなかでも最も無名なものになってしまっている。後年，サント・ブーヴも指摘したように，18 世紀後半のこの時代において，この研究が時代錯誤的な古臭さを伴っていたことは否定できない。「生命の高揚と喜びである，このような研究は決して誤りではない。だが，彼がその研究に与えた形式からして，少なくともその誤りはアナクロニズムにあったのである…[20]」。

2. ディジョンの知的風土の変容

9 ヶ月のイタリア滞在から帰郷したド・ブロスは 1741 年に部長評定官職を購入し，ここにプレジダン・ド・ブロスが誕生する（1775 年に院長）。翌年には，33 歳の若きプレジダンは最初の婚礼をパリで挙げた。相手は『永久平和論』で名高いアベ・ド・サン＝ピエールの姪，フランソワーズ・カステルである。この結婚は，むろん双方の地位を考慮したものであったが，史家たちはド・ブロスにとって，インド会社の大株主を父に持つ彼女の持参金代わりの大量の株券目当ての結婚だったと指摘している[21]。ジョージ王戦争（1744–1748）で，結局株価は暴落して彼の目算は崩れるが，この結婚で彼はパリで多くの知的人脈を築くことができた。マルゼルブ，リシリュー元帥，クレヴクール侯爵夫人はじめ，ルソーの『告白』で有名となったデュポン夫人のサロンや，フォントネルや老サン・ピエール師たちと晩餐を共にしたタンサン夫人のサロンなどを拠点に，パリでのド・ブロスの交友関係は一挙に広がった。1746 年にパリの碑文・文芸アカデミーの通信名誉会員に推挙されると，そこでは東洋学者ニコラ・フレーレ，のちに『原始世界』を著すクール・ド・ジェブラン，そして弟がその書『世界周航記』で有名になるジャン＝ピエール・ブーガンヴィルやパリ滞在中のヒュームらと知己になり，さらにフィロゾーフ関係ではチュルゴー，ダランベール，グリム，ディドロ，エルヴェシウス，そしてフォンスマーニュ家では『ローマ帝国衰亡史』を準備していたギボンとも面会している。常に華やかな集まりの中心にいるド・ブロスを見て，「楽しむことだけが彼の唯一の仕事[22]」と周囲に皮肉られるほど，とにかく社交的だった彼にとって，パリは移住こそしなかったが，自分の見識と親交を深めるために生涯のうちに何度も訪れる場所となった。だが，大いなる感激をもって読んだ『法の精神』の著者にはどうもド・ブロスは生涯一度も会わなかったらしい[23]。

1746 年，ディジョン人文主義の重鎮であったブイエが死去する。当然悼辞を読んだのは彼

---

[18] 伝記作家たちは死去前にこの書が出版されたとしているが，出版者の献辞によれば死後に出版者によって原稿が集められて出版された。Cf., «Dédicace», in *Histoire de la République Romaine, par Salluste*, Dijon, 1777

[19] Mamet, *op. cit.*, p. 188

[20] Sainte-Beuve, *op. cit.*, p. 88

[21] Foisset, *op. cit.*, p. 91; Y. Bézard, *Lettres du président de Brosses à Ch.-C.Loppin de Gemeaux*, Paris, 1929, p. 39

[22] H. Maret, *Éloge historique de Monsieur de Brosses*, Ed., S.l. [1777 ou 1778], p. 8

[23] Foisset, *op. cit.*, p. 429, p. 547

に最も寵愛されていたド・ブロスであった。だがこれ以降，同年に推挙された，先の碑文・文芸アカデミーへと彼は徐々にその報告の場を求めてゆく。彼はこの時まで何も出版していなかったが，サリュスティウスの仕事を知っていたメロの助力や，『イタリア便り』の草稿がアカデミーで回覧され始め，彼の名声は少しづつだが増していた。この年を起点として彼の主要著作が出るその後の 20 年間が彼の最も活発な時期になったことを考えれば，このアカデミーへの入会は彼の学究生活において一つの転機となったといえる。ド・ブロスが再びサリュスティウスに取り組む決意をしたのも，このアカデミーの同僚たちに刺激されたところ大であった。だが，まだ彼の研究の性格に目に見える変化が表れたわけではない。そこでの最初の報告（1747）は予想通りサリュスティウスに関するものであったし，50 年に出版された最初の刊本『都市ヘルクラヌムの現状便り』もやはり古代を題材とした，彼のイタリア旅行から生まれた産物であった。ヴェスヴィオ火山の下敷きとなった古代ローマ都市の再発見に関する後者の研究は，発見後 40 年近くもその全貌が未だ明らかにされないこの都市への当時の知識人たちのアクチュアルな関心を反映して少なからぬ反響があったのは事実だが，それでもやはり，この書は人文主義の伝統に位置づけられる研究であったのである。

しかし，アルデが分析しているように，ディジョンのような保守的な都市でさえ，啓蒙主義の精神が絶頂に達した 1750 年頃には，ひたすら古典研究の伝統を墨守するだけの人文主義はその知的運動としての名声を失い始める[24]。その大きな要因が，ルソーの『学問芸術論』（1750）に賞を授与して有名になるディジョン・アカデミーの創設（1741）であった。この団体は，ブイエらの貴族的な文芸協会とは異なり，同時代的なテーマや実用研究の支援をその目的としていたため，新興ブルジョワ中心のこの団体のリストに貴族の名はなく，医学，物理学，道徳哲学の三部門しか存在しないそのプログラムからは，当然にも古典主義や人文主義研究といったテーマは排除されていた。ド・ブロスを含む法服貴族たちは，このような皮相な知的風潮の変化に気づき，そして嘆いた。マメは当時の高等法院とブルジョワジーの協調関係を強調しているが[25]，事実はその逆で文化面だけでなく政治・社会的力学からしても，大領主や高級官僚に代表される特権階級は，彼らが軽蔑する商業に基盤におく新興階級とは正反対の道徳的価値の世界に生きていたのである。だが，ただ嘆くだけでは時代に取り残されるだけである。その文化的影響力を維持するには，人文主義の伝統を全て破棄しないまでも，その時代の新しい思想運動との妥協を彼らは迫られることになる[26]。

ブイエの会の旧メンバーたちは，まず 1752 年にプレジダン・リュフェイの館に集結し，かつての文芸協会を刷新した。この通称「リュフェイの会」は，新たに規約を作り，通信会員を入会させ，ブイエのそれのような内輪のサークルではなく，アカデミーとしての体裁を整えていった。またその学問的態度も，人文主義の伝統を維持すると同時にアクチュアルなテーマにも広く門戸を開放し，会員たちはかつて以上に実践的な研究に傾倒していった。そのうえ 1749 年から大著『博物誌』をすでに出版していたビュフォンが，彼らの協会に加わったこともまたこの傾向に拍車をかけた。彼は 1732 年のイタリア旅行後，ド・ブロスと違いディジョンの保守的風土を嫌って早くからパリに移住し，啓蒙合理主義の非常に近いところで活動して

---

[24] Harder, *op. cit.*, pp. 245–248

[25] Mamet, *op. cit.*, p. 13

[26] Bouchard, *op. cit.*, p. 637

[27] ロジェ『大博物学者ビュフォン』ベカエール直美訳，工作舎，1992 年，30〜35 ページ

いたからである[27]。ド・ブロス自身もまたこの会合でのちの『南方大陸航海史』と『言語形成論』の基礎となる報告を行っている。ディジョン・アカデミー創設会員であったビュフォンの入会が象徴的に示しているように，徐々にこの二つの学術団体の溝は埋められてゆき，1759年，最終的にアカデミーに吸収される形で合併するに至るのである。これを機にアカデミーに受け入れられたド・ブロスを含む貴族たちにとって，この一連の出来事はある意味でブルジョワジーに対する文化的敗北を示すものであったが，再び彼らがこの都市の知的生活を支配するには，それは避けがたい代償であった[28]。18世紀のブルゴーニュの知的風土を扱ったブシャールが正当にもその書を『人文主義から百科全書へ』と題したように，このディジョンの社会・文化的変化こそ，1750年代後半から出版が始まるド・ブロスの主要著作の背景にあるものなのである。

二　著作と思想

1.　ド・ブロスと百科全書の精神

サント・ブーヴが指摘したように，確かにド・ブロスは決してパリを中心とした狭義の百科全書派に属してはいなかった。だが1750年以降のディジョンの知的風土の変化と彼自身のパリでの交友関係の拡大は，時代の新しい思潮の大きなうねりの中へとド・ブロスを引き寄せてゆく。まずその最初の大きな接点となったのが，『百科全書』への寄稿であった。

1751年，ド・ブロスは碑文アカデミーで語源に関する二本の報告を発表する。通常，このような報告はアカデミーの紀要に収められるが，ディドロがそれを高く評価し，同年から出版が開始された『百科全書』の複数の項目に採用されることになったのである。「言語」「文字」「比喩」「オノマトペ」といった項目はこの二つの報告から生まれている[29]。さらにこれら草稿はディドロから数人の手に渡り，「語源学」項目をチュルゴーが執筆する際にも利用された。ただこの時に，ディドロはこの原稿をド・ブロスに断りなく彼らに渡し，しかものちに剽窃の疑いがでるほどチュルゴーはこの草稿に依拠して書いたため，ディドロとの仲はその後徐々に冷えていったようだ[30]。だがド・ブロスはこの苦い経験にも屈せず，この二本の報告とチベットの古文書に関する報告を一冊の書物にするために，1763年からディジョン・アカデミーで具体的な各章の草案を精力的に報告してゆく。このような長いプロセスを経てついに二巻本『言語の機械的形成論』（1765）が出されるのであるが，その冒頭は次の言葉から始められている。「ここに公にされる言語の諸要素に関する論考は，多くの文人たちにかなり前から知られていた。数年もの間，この手稿は人から人へと手渡され，そのうちの何人かの手中に留められてきたのである。人類の発見とその知識の収集を目的とした壮大で著名な集成［『百科全書』］にそれが利用されたことはもちろん，最近の幾つかの書物のなかにも，しばしばその考えや表現が見つかることだろう［…］[31]」。10年以上に亘ってこの書の草稿が辿った紆余曲折とその内容に対するド・ブロスの自負心を，この短い文章からも伺い知ることができる。

18世紀はライプニッツやコンディヤック，ルソーに代表されるように，言語の起源につい

---

[28] Bouchard, *op. cit.*, p. 735

[29] この報告から以外では「音階」項目がド・ブロスの手になる。

[30] Cf., O. Richard-Pauchet, «De Brosses victime d'une théorie esthétique dans les Salons de Diderot», in *Charles de Brosses et le voyage lettré au XVIIIe siècle*, E.U.D, 2004, p. 99

[31] De Brosses, *Traité de la formation méchanique des langues*, Paris, 1765, t. 1, p. iii

て様々な人々によって活発な議論がなされた時代である。言語（ヘブライ語）が天啓から人間に授けられたものでないとすれば，それはどのように自然に形成されたのか？この問いへの回答は，自然を模倣した人間の身振りや感情的な叫びから次第に習慣的な言語へと移行していったとする，感覚論的な模倣説がその当時の主流であった[32]。ド・ブロスの言語への関心もその範に漏れず，『言語の機械的形成及び語源の身体的諸原理に関する論考』という正式な書名が示すように，全人類に共通な原初の語根となる音節を身体の発話構造から導き出そうとする極めて唯物論的な発想に依拠している。原初の言語とは「有機的，身体的，必然的で全人類に共通し，この言語を世界のどの民族もその原初の状態で知っているわけでも，使っているわけでもないが，やはり万人によって話され，あらゆる国の言語活動の第一の根底を成している[33]」ものである。それゆえ未知の原初言語のこの母胎を突き止めるには古今東西の既知の言語の比較検討を通じてしかありえない。方法としての比較法はすでに『フェティシュ神』でも宗教の起源を辿る際に応用されており[34]，彼の著作において比較主義は，人文主義の文献学的伝統とアクチュアルな学問的テーマを結びつける媒介的な役割を果たした方法であったといえる。

ド・ブロス自身が極めて「フィロゾーフ的」と呼んだこの書は，予想に反して大きな反響を呼び，品切れとなった市場では定価の五倍もの値がついた[35]。1772 年に英語版，1777 年にドイツ語版が，フランスでも 1801 年に再版が出ていることからも窺われるように，彼の存命中に最も知られ，議論の的となった書物こそこの『言語形成論』であった。19 世紀も半ばになるとその唯物論的・啓蒙主義的側面が批判の対象とされるが[36]，このような批判自体がその書のもつ「フィロゾーフ的」側面を逆に裏書きしているといえる。この書を「18 世紀の言語学の傑作[37]」（ヴェルニエ）としたり，その著者を「近代言語学の先駆者[38]」（テイラー）とするその後の評価も逆に過大で雑駁にすぎるとはいえ，近代普遍言語に関する近年の歴史研究の多くが証言するように，18 世紀の言語起源論の系譜のなかでこの書の占める位置は決して小さくはない[39]。

ところで，この書の草稿がパリのアカデミーで報告されてから出版まで，実に 15 年の歳月が費やされたことになるが，もちろんこの間ド・ブロスはこの仕事だけに専念していたわけではない。『イタリア便り』の完成（1755 年頃）や『フェティシュ神』の出版といった出来事に加えて，『言語形成論』以上に 18 世紀のフランス社会と実践的な繋がりをもつことになる著作を公にする。1750 年以降のディジョン社会の文化的変容が彼の知的活動なかでいち早く現れた著作こそ，『南方大陸航海史』（1756）であった。

この出版に先立つ 4 年前，「リュフェイの会」でモペルチュイの『科学的進歩書簡』（1752）が朗読される。この報告は，当時まで未知であった南方大陸を探索し，地理的・生物学的新発

---

32) ノウルソン『英仏普遍言語計画』浜口稔訳，工作社，1993 年，207～208 ページ

33) De Brosses, *op. cit.*, pp. xv–xvi

34) 拙稿「啓蒙思想としてのフェティシズム概念」『一橋論叢』 8 月号，2005 年，107 ページ

35) H.Sautebin, *Un linguiste français du XVIIIe siècle: le Président de Brosses*, Berne, 1899, p. 23

36) この書へのフォワセ，および彼が引用しているバランシュの書評を参照。Cf., Foisset, *op. cit.*, pp. 449–451, pp. 456–458

37) L. Vernier, *Étude sur Voltaire grammairien*, Paris, 1888, p. 24

38) A. C. Taylor, *Le Président de Brosses et l'Australie*, Boivin & Cie, 1937, p. 14

39) ノウルソン，前掲書，208～210 ページ。ヤゲェーロ『言語の夢想者』谷川・江口訳，工作社，1990 年，87～88 ページ。エーコ『完全言語の探求』村上・廣石訳，平凡社，1995 年，142～143 ページ

見の可能性を喚起することで，フリードリヒ 2 世に探検資金を願い出るための一種の嘆願書であった。パタゴニアの巨人族や尾っぽをもつ野生人の可能性にまで言及するその突飛な内容から，この書は政府や世論に深い影響を与えなかったが，幼少から地理学に興味のあったド・ブロスはこのテーマに強く惹きつけられてゆく。早速，例のごとく古今の南半球の旅行者たちの文献を熱心に渉猟し，当然にも彼の次回報告のテーマは南方大陸となった。その内容は未知の大陸の可能性はもちろん，その発見が祖国の栄光と商業にいかに重要であるかを力説したものであった。この発表に，南方商業地の選定とその土地の気候・習俗に関する二本の報告を加えた原稿が，パリにいたビュフォンへと送られ，公私にわたる彼の助力により 1756 年に出版に至るのである。

ところがその直後，フランスはイギリスとの七年戦争（1756–1763）に突入し，カナダを含めた大半の海外植民地を失うことになった。この敗戦はフランスの海軍力の低下と財政難を引き起こし，もはや未知の大陸の探索などという夢物語に政府も世論も完全に関心を失ってしまったように，ド・ブロスには思われた。だがカナダ戦線からの多くの帰還兵のなかに，イギリスの植民地帝国建設の野心に危機感を抱く一人の若きフランス人将校がいた。ド・ブロスはその計画実現の夢を，アントワーヌ・ブーガンヴィルその人に託すことになる。

2. 『南方大陸航海史』と野生への視線

ギリシアのアトランティス大陸伝説以来，二千年間航海者たちを虜にしてきた未知の南方大陸の問題に対する解答の最終段階が，この『南方大陸航海史』の出版であった。この大陸は現在我々がいう豪州大陸や南極大陸ではなく，ユーラシア大陸に匹敵するほどの広大な土地が南方にもあると考えられてきたのである。今の豪州大陸はその一端に漂着したオランダ人によって「ニュー・オランダ」と名付けられ，その土地が幻の南方大陸の一部だと信じられてきたが，その真相はなおも闇のなかであった[40]。実践面ではこのような状況にあったが，イギリスの海賊ダンピアとフランス人探検家ゴネヴィルの航海記が 17 世紀中にそれぞれ出版されると，彼らの探検は当時の知識人の関心を引き，「旅行記」という文学ジャンルが成立する契機となっていった。この時代，ド・フォワニ『南方大陸ついに知られる』（1676）を嚆矢として未知の大陸を舞台としたユートピア物語が数多く出されるが，「空想もの」によって既存の体制やキリスト教批判を行う格好の題材とされたのである[41]。

フランスでは 17 世紀後半以降，度重なる戦争の影響で探検熱は下火になっていた。だがロンドン王立アカデミーに続いて 1666 年にパリ科学アカデミーが設立されると，科学面から大きな関心が集まり始める。モペルチュイやビュフォンら科学者たちが南方大陸に関心を傾けていった下地がそこにあった。ビュフォンは『博物誌』でまだ未知の大陸が存在することを告げている。「南極側にある土地はほとんど我々には未知である。ただそれが存在すること，そして海洋によってその他の大陸から隔絶されていることだけはわかっている［…］。これまで新大陸を探索する栄光よりも，既知の土地を開発する実益が好まれてきた。だがこの南方大陸の発見は大きな関心の的となるだろうし，しかも有益であろう[42]」。これに続くかたちで，先のモペルチュイの『書簡』がだされ，ド・ブロスが注目する契機を作ってゆくのである。17 世

[40] 高山純ほか著『地域からの世界史: オセアニア』朝日出版社，1992 年，95〜100 ページ
[41] アザール『ヨーロッパ精神の危機』野沢協訳，法政大出版局，1973 年，14 ページ，30〜33 ページ
[42] Buffon, *Histoire naturelle*, t. 1, Paris, 1749, p. 212

紀半ばから高まりだしたこの科学的関心と，商業や植民地を基盤としたフランスの繁栄という二つの大きな関心を統合した研究こそ，この『航海史』であった[43]。

二巻五部構成からなるこの書の第二部から第四部までは，彼が収集した16世紀から18世紀までの旅行記を批判的に要約したものであり，先のリュフェイの会での三報告を土台にしたその第一部と第五部こそ，この著作の理論的・実践的側面を担っている部分である。ここでド・ブロスは，古典的ユートピア文学と距離を取りつつ[44]，自然学と文献学的知識から導き出された大陸存在の可能性をはじめ，航海や先住民との接触に伴う困難に対する予測と助言を行っているが，なかでも彼が重視したのは，もちろん地理学上の関心に裏打ちされた科学的発見への期待であった。南半球にこの未知の大陸が存在するとすれば，「いわば我々にとって別の惑星とも違わないほど異質な世界[45]」で生きる未知の動植物とは，さらに文明以前の人間の状態とは一体いかなるものなのか。そしてこの関心の延長上に現れてくるのが現地の植民地化計画である。オランダに依存した香辛料貿易からフランスを脱却させるという商業的な思惑もあったとはいえ，彼の主要な関心は平和理に植民地化を進めて，物質的，特に文化的に貧しい野生人を社会状態へと導き，文明の恩恵に浴させることにあった。

彼はいう。「彼らが目にする我々の尊重する公序や，規律ある社会から由来する明らかな利点から，彼らはそれを模倣し，粗野な習俗を和らげ，最終的に人間―外見だけは今もそうだが―となるであろう」（T.A. 1: 17）。だがはたして彼らにこのような文明化が可能だろうか。「南方人（オーストラリア人）たちの状態と変わらない粗野な状態にいた」太古のヨーロッパ人たちが現在のような高度な文明に達したのだとすれば，「他のどの民族も我々のように到達することが可能である」（T.A. 1: 19–20）。なぜなら，人間は「その本性からして多少の差はあれ社会へ向かう能動的な要素を自らのうちに宿している」（T.A. 2: 374–375）からである。この計画が野生人に幸福を与えると同時にフランスの栄光にも質することを信じて疑わない，かつての古典学者ド・ブロスの主張は政府に対しても向けられる。かつて古代ギリシアに技芸と知識の全てを教えたフェニキアが浴した栄光を，南方人に対して今度はフランスが浴する番であり，戦争などより遙かに高貴な「この地理上の企てによってこそ，国王は最大級の栄光に達することができる」（T.A. 1: 8）からである。ド・ブロスにとって，野生人の文明化は善意の手助けというより，ヨーロッパやフランスにとっての一種の歴史的使命に近いものであった。

むろんこの主張に政府は動かなかったが，一人の若きフランス人が反応した。『航海史』に接して船乗りになる決意をした彼こそ，のちに『世界周航記』（1771）の著者となるブーガンヴィルであった[46]。彼はイギリスに先んじて1763年から私財を投じて二度にわたりマルウィ

---

[43] Taylor, *op. cit.*, p. 48

[44] 『航海史』におけるユートピア思想との断絶と連続については次をみよ。J-M. Racault, «Résonances utopiques de l'*Histoire des navigations aux Terres australes* du président de Brosses», in *Mythes et géographies des mers du Sud*, S. Leoni et R. Ouellet (Ed), E.U.D, 2006, pp. 43–61

[45] De Brosses, *Histoire des navigations aux Terres Australes*, t. 1, Paris, 1757, p. 16（以下，T.Aと本文に略記し，巻数と頁を示す）

[46] ド・ブロスが新版準備に書き貯めていた『世界周航記』の抜粋ノートにはこう記されている。「彼［ブーガンヴィル］自身が著者に語ってくれたように，『航海史』の初版を読んだことで，彼は自分の頭にしばしばよぎっていたこの種の探検へとつき動かされたのだった」（Taylor, *op. cit.*, pp. 142–143）。このノートを含めた書簡・草稿類は現在，フランス国立図書館が所蔵している。今回はこれを参照できなかったため，以下の引用はすべてテイラー及びフォワセの研究書の引用に依拠した。

ヌ（フォークランド）諸島に植民地建設の航海に出るが，二度目の航海を成功させて帰還したとの報を受けたド・ブロスはその喜びを弟に伝えている。「大きな，とても大きな喜びだ！うれしすぎて飛び跳ねたほどだ。ブーガンヴィルが南方大陸の二回目の航海から昨日帰ってきたのです。［…］ついに国民の一人を奮起させることに私は成功したのだ！二回の航海が彼とその友人たちの財産を失わせてしまった今こそ，彼を援助せねばなりません[47]」。だがこの“師弟”にとって南方大陸の問題はなおも残された懸案であった。ブーガンヴィルは1766年に再び政府から航海の許可を取りつけて今度は太平洋へと再出発する。この出航に再び喜んだド・ブロスはその船出を見送りにいったという。彼にとって今回の航海は自分の理論を証明する大きなチャンスでもあった。現地での観察と自著の推論を照合させるために，ブーガンヴィルに助言して植物学者コメルソンを同船させ[48]，彼に『航海史』を一冊持たせた。はたして乗組員の一人は旅先からこの書の恩恵について報告している。「この航海の詳細な報告を貴方にお知らせし，貴方の著作に基づき私が作ったメモをそこに添付いたします。貴方の著作は私にとって大いに役立ちました。そこに書かれている知識の全てを利用するために，船員の全員が，航海の宝ともいえるこの書を一冊ずつ携帯すべきでありました［…］[49]」。この書は確かに専門の航海士に向けて著されたものではなく，過去の文献に頼った机上の研究であった。だが，文献学者としての史料批判と，南方大陸の発見という実践的な関心が見事に融合した研究であったことは，この書がブーガンヴィル個人やその航海に与えたインパクトから推し量ることができよう。

だがブーガンヴィルのようなケースは，当時の社会的・知的環境の中では希な事例であったといっていい。財政的に疲弊した政府はもちろん，探検の新発見などはなから期待しないヴォルテールや[50]，ディドロのように「ホッブズの社会学説を糾弾しながら，そのくせ国家間でそれを行使している[51]」ヨーロッパ諸国の植民政策によって善良な野生人の生活を改造すべきではないと考えた人が少なくなかったからである[52]。そのうちの一人，ルソー流の思想に共感するジュネーヴの友人に対してド・ブロスは激しく反論している。「これほど知識をお持ちでうまくお使いになる貴方が，既得の知識に遺憾の念を抱いていることが，私にはよいことだとは思えません。［…］それはつまり，我々に森で野ウサギの狩りを勧めるような，貴方の非凡な同郷人［ルソー］の哲学的な病が流行しているということなのでしょうか？あるいは私が行った南方人の生活描写が貴方にひどく魅力的に映り，彼らをいつまでもあのような状態に放置しておきたいということなのでしょうか。［…］政治家としては私はホッブズ主義者であり，当然にも人間は戦争状態にいるものと考えます。商人としては私は優しい心の持ち主ですが，それはただ自身の利益のためにそうであるにすぎません。［…］次のことは申し上げておきたい。

---

47) Taylor, *op. cit.*, pp. 144–145; Foisset, *op. cit.*, pp. 473–474

48) このような科学者の同船は遠洋航海史上初の出来事であった。山本淳一「ブーガンヴィルの生涯と『世界周航記』」『ブーガンヴィル世界周航記』山本淳一訳，岩波書店，1990年，409ページ

49) Taylor, *op. cit.*, p. 151

50) 彼はモペルチュイの『書簡』を妄想患者の戯言として揶揄している。Cf., Voltaire, «Histoire du Docteur Akakia», in *Œuvres complètes de Voltaire*, Paris, t. 23, 1879, pp. 559–585

51) ディドロ「世界周航記」『ブーガンヴィル航海記補遺』濱田泰佑訳，岩波文庫，1953年，11ページ

52) 18世紀の西欧知識人の楽園幻想については次を参照。山中速人『ヨーロッパからみた太平洋』山川出版社，2004年，10〜37ページ

貴方の適切な考察がいかに私を喜ばせたとはいえ，全体的には貴方の共感を私は共有してはいないということです。人間というものは誰しも底意地が悪いものですが，私には野生人はあらゆる人種のなかで最悪なものに思われるのです[53]」(1757 年 8 月 30 日，ピット宛書簡)。

結局，ブーガンヴィルのその後の探検とそれに触発されたイギリスのクック隊の派遣によって長年の「幻の南方大陸」伝説に終止符が打たれ，それと同時に『航海史』の同時代的な役割も終える。なるほどド・ブロスがそこで展開した主張は事実とかなり異なっていたし，すでに幾つかの点で 19 世紀に顕在化する帝国主義的関心の一端もそこに垣間見ることができよう。だが，かつてのように過去の古典的学識で満足することも，のちのロマン主義のような冒険的精神を称揚することもなく，正確な情報の収集と実地の観察に依拠しようとするその時代の科学的精神をこの書が体現していたこともまた事実である。「新しい科学的精神がヨーロッパ古典の伝統といまだ分離することなく，美しい調和と均衡を保っている[54]」―ブーガンヴィル『世界周航記』に対するこの賛辞を，同じくド・ブロスの『航海史』に贈ったとしても，おそらく大過あるまいといえよう。

おわりに

思想家ド・ブロスと，18 世紀社会・思潮との接点を中心にここまで駆け足で触れてきたが，いくつかのトピックについては割愛せざるを得なかった。二度の追放を経験した法院官としての彼の政治生活や，ほとんどの書簡の事後創作が判明した『イタリア便り[55]』，そして薪代の支払いを巡るヴォルテールとの諍いがそれである。また冒頭でも述べたように，本小論では外的な紹介に留まった各著作の内容の分析や評価についても，稿を改めて論じるべき今後の課題である。だが最後に，啓蒙思想と地方都市ディジョンを結ぶ一人の思想家との関係には触れないわけにはいかないだろう。もちろん，その思想家とはルソーである。

1754 年，ディジョン・アカデミーの懸賞論文にルソーが再び応募したとき，パリにいたド・ブロスは郷里の弟にちょっとした秘話を披露している。「今年ルソーはディジョンのコンクールに応募しました。[ルソーの友人]ゴフクールは，この作品が受賞するのか知りたくて待ちきれずにいます。この作品を送ったのは彼なのです。そこで，［アカデミーの選考主任]フォンテットに巧みに話を持ちかけて聞き出してくれませんか。でも彼の名を出してはいけません。もし連中がこの作品がルソーのものだと知ったら，もう彼には受賞させないでしょうから。身分の不平等に関する彼の作品は歯に衣着せぬもので，彼の友人たちにかなり和らげられたとは

---

[53] Y. Bézard, *Le président de Brosses et ses amis de Genève*, Paris, 1939, p. 44; R.A. Leigh (Ed.), *Correspondance complète de J-J. Rousseau*, Genève, 1965–1998, t. 4, pp. 242–243

[54] 中川久定「『世界周航記』の位置」『ブーガンヴィル世界周航記』，前掲，428 ページ

[55] この書の複雑な編纂過程及びその研究史は次を参照。Y. Bézard, *Comment le président de Brosses a écrit ses <Lettres d'Italie>*, Paris, [s.d]; Idem (Ed), *Lettres familières sur l'Italie*, t. 1, Paris, 1931; De Azevedo, «Les éditions des *Lettres familières*: analyse et perspectives», in *Charles de Brosses 1777–1977*, Slatkine, 1981; F. d'Agay (Ed), *Lettres d'Italie du président de Brosses*, t. 1, Mercure de France, 1986；井上祐子「ドゥ・ブロスの『イタリア便り』」『短大論集』関東学院短期大学，109 号，2002 年。筆者の感触では，現在まで最新のダガイの論考は自らの新版の独自性を強調するあまり，ベザールの仕事への歴史的評価を過度に下げている印象がある。また井上論文は事実関係に誤りが多い。

[56] Y. Christ, «Le Président de Brosses à Paris», in *La Revue de Paris*, sep. 1965, p. 52; Leigh (Ed.) *op. cit*., t. 2, pp. 259–260

いえ，連中によればなおも凄まじいものだそうです[56]」。この手紙からも分かるようにディジョンに縁のあるルソーにド・ブロスは常に関心を向けていた。だがモンテスキューの場合と同様，その生涯においてルソーとの個人的な関係はなく，その思想傾向からしても，野生を無価値だと見なしたド・ブロスにとって，ルソーと必ずしも馬があったわけではない。だがこのディジョンのプレジダンは，ある必要に迫られて一度だけルソーに手紙を出したことがある。

1760 年，七年戦争で財政難に陥った政府は，貴族を含めた全階層への新たな課税を決定する。「専制」王権の行政介入に反対するディジョン高等法院は当然にもこの王令の登録を拒否し，これを契機にいわゆる「ヴァレンヌ事件[57]」が勃発するが，この時にド・ブロスがその文体の力強さと雄弁を見込んで，国王への建言書作成の任に指名した人物こそルソーあった。「私はためらわず貴方にこの任をお願いしたい。この役目はそれ自体光栄なことでしょうし，貴方の高貴な自由に，そして人類の利益のためだけに貴方が用いる雄弁にも値するものであります。［…］貴方のような強靱な精神に対するこれほどの敬意の念をお汲みくださり，貴方が決心してその祖国の善のために熱心な権威ある団体［高等法院］に協力してくださることを私は疑いません。この祖国は貴方自身にも大切であるはずです。最初に貴方の才能を認め，それに正当性を与えたこの国を，貴方もご自分の名声の出発点と見なしているに違いないからです[58]」（1762 年 1 月 3 日）。

現在，この手紙へのルソーの返信は残されていない。だがのちに『告白』の著者は，少々恩着せがましいともいえるその内容を読んだ時のことを回想している。「手紙を受け取ったとき私は不機嫌だったので，書いた返事のなかにもそれが現れて，求められたことをきっぱりと断った。私はそれを悪かったとは思っていない。この手紙は私の敵からの罠かもしれなかったし[59]，求められたことは私が決して捨てたくない原則に反していたからである[60]」。結局，仕方なく自ら建言書を起草したド・ブロスではあったが，それでもルソーを読み続けた。『新エロイーズ』をはじめ[61]，死後の競売用蔵書カタログにも『エミール』『不平等起源論』『社会契約論』『山からの手紙』『気まぐれ女王』の文字が見える[62]。ド・ブロスは確かに彼の文才と雄弁に終生魅了されつづけた。だがその思想と生き方にはやはり共感できず，彼はルソーに対して最終的に厳しい判断を下している。「ジャン＝ジャックは，自分の母親の乳房に噛みつく悪童です。［…］彼はこの時代の最も美しい才能の持ち主であり，偉大な作家の一人であることは間違いありません。その上優れた哲学者の資質と内実をもち，それは決してうわべや単なる外見などではありません。しかしその雄弁の全てを背理へ，その弁術の全てを詭弁へと傾けて，その精

---

[57] ブルジョワ出身の州三部会秘書官ジャック・ヴァレンヌが税の徴収に賛成し，これを契機に高等法院と，その権力分割を主張する三部会執行部の間で勃発した権力争いのこと。王権勢力への高等法院の積年の抵抗は，「民衆の擁護者」に名を借りた既得権益の保護という性格をしばしば伴うものであり，同時にこれは彼らが依拠する旧体制自体を結果的に崩壊に導くことになる。

[58] Leigh (Ed.) *op. cit.*, t. 10, pp. 2–3

[59] ここにルソー自身による次の注が入る。「たとえば，某高等法院のこの某プレジダンが百科全書派やドルバック一派と強い結びつきがあったことを私は知っていた」。ド・ブロスが「ドルバック一派と強い結びつきがあった」というのはルソーの思い違いか，あるいは意図的な作話である。

[60] ルソー「告白」『ルソー全集』第 2 巻，小林善彦ほか訳，白水社，1978 年，191 ページ

[61] Y. Bézard, *op. cit.*, 1929, p. 286

[62] ［s.n］, *Catalogue des livres de feu Mr. De Brosses, premier président du Parlement de Dijon*, Dijon, 1778, pp. 9–52

神の非凡な力をすべて集めては自ら不実のはぐれ者となっている男を，何と考えればよいのでしょうか。彼が不幸であることをまさに喜びとしていることをみれば，不幸だからといって私は彼には同情しがたいのです[63]」（1766 年 2 月 18 日，ジャラベル宛書簡）。

私生活では孤独を嫌って常に華やかな社交の場を求め，『航海史』では社会性を人間の本性と考え，野生人を社会化させる使命を訴えたド・ブロスの目には，自然状態から社会状態への文明化を堕落と説き，「不幸であることを喜ぶ」ジュネーヴのこの孤独な反逆児は，いわば社会化を拒否する自然人，あるいは文明社会の内部に生きる野生人の姿に映ったに違いない。人々との交流を求め何度も訪れたパリで 1777 年に客死するド・ブロスと，彼が維持しようとした体制そのものが内部から崩壊へと向かいつつあった旧体制の背後には大革命が，そして 18 世紀ヨーロッパの文明社会に根本的な懐疑を突きつけるロマン主義の時代が間近に迫っていた。

［2006 年 12 月　レフェリーの審査を経て掲載決定］
（一橋大学大学院博士課程）

[63] Y. Bézard, *op. cit*., 1939, pp. 45–46; Leigh（Ed.）*op. cit*., t. 28, p. 312.